

第 43 回日本職業・環境アレルギー学会総会・学術大会

シンポジウム 薬剤アレルギー その実態と対策

最近の薬疹とその対策

相原道子 Michiko AIHARA

横浜市立大学大学院医学研究科環境免疫病態皮膚科学

Yokohama City University Graduate School of medicine, Department of
Environmental Immuno-Dermatology

抄録

薬疹は日常診療でしばしば遭遇する疾患であるが、その臨床像や原因薬剤はそれぞれの時代で使用される薬剤や罹患する疾病により変化していく。近年、新しい抗癌剤や分子標的治療薬などに代表される新しい薬剤が次々と開発され、それらによる薬疹が急増している。また、サイアザイド系薬剤がアンジオテンシンレセプター阻害薬との合剤として使用頻度が再び高まり、サイアザイドによる薬疹をふたたびみるようになった。これらについて、当科の症例を紹介するとともに、最近の当科の薬新患者の臨床統計を示す。重症薬疹である Stevens-Johnson 症候群および中毒性表皮壊死症については、厚生労働科学研究重症薬疹研究班による疫学調査結果が昨年報告された。その内容を紹介し、わが国の重症薬疹の実態について解説する。

薬疹の治療にはステロイド薬が多く用いられる。一方、ステロイド薬によるアナフィラキシーや遅延型アレルギーによる薬疹が稀であるがみられる。ステロイドアレルギーの患者は、その対処が難しく治療に使用する薬剤も制限される。そのような患者に遭遇した場合の対処について症例を示しながら考えてみたい。また、職業アレルギーの観点から注意すべき問題として、医療現場における接触感作による薬剤性アナフィラキシーについても触れてみたい。